

ことばだより

Vol.3

2021（令和3）年9月

連載

「全国学力・学習状況調査」を 日々の授業に生かす

埼玉大学准教授
もとはしゆきやす
本橋幸康



1. 学力調査の目的・趣旨を理解する

「全国学力・学習状況調査」に関連した次の資料等を確認しながら、児童一人一人の解答の状況等に目をつけて授業づくりを工夫しましょう。

①『全国学力・学習状況調査 解説資料』

実施直後に公表。問題や正答例のほか、出題の趣旨、児童一人一人の解答状況を把握するための「解答類型」等が示されています。

②『全国学力・学習状況調査 報告書』

採点・返却にあわせて公表。分析結果と課題、「学習指導に当たって」等、本調査結果の正答（誤答）の反応率や課題を整理し、具体的な学習活動の例が示されています。

③『全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた 授業アイデア例』

報告書にあわせて公表。特に本調査において課題のあったものを取り上げ、課題に応じた実践の提案、授業づくりの参考となる事例が示されています。

※これらの資料は、国立教育政策研究所のホームページにて公開されています。

また、自治体による学力調査の結果を踏まえた授業改善の取り組み事例も参考にしましょう（名古屋市教育委員会『平成31年度全国学力・学習状況調査 教員向け報告書』（令和元年11月）／埼玉県北部地区市町村教育委員会『学習状況調査を活用した授業アイデア集【小学校版】』（平成27年3月）等）。

2. 目的に応じた言語活動を設定する

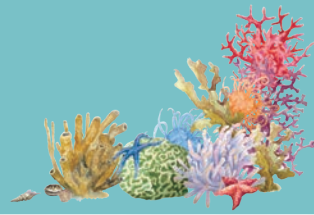
全国学力・学習状況調査では、学級で興味をもった人物について調べ、スピーチで紹介し合う場面（令和3年度①）のように具体的な状況が設定され、目的に応じて話し合いの様子やメモ、資料等、複数の情報を関連づけて言語活動に取り組む過程そのものが問われてきました。いわゆる内容把握の読解問題にとどまらず、目的に応じて情報を取捨選択し、再構成して人に伝える過程そのものが問われてきたといえるでしょう。「教科書に書いてあるから」「先生に言われたから」考えたというような授業展開ではなく、児童自身が学習課題を自らの課題として捉え、目的に応じて言語活動に取り組む授業展開を工夫しましょう。

3. 友達の取り組みのよさ、工夫を共有する

目的に応じた言語活動に関連して、全国学力・学習状況調査では、児童の言語活動の「工夫」が問われてきました（読者にプラスチックごみの問題を自分のことと捉えてほしいと考えた、岩田さんの下書きの構成の工夫の説明を選択肢から選ぶ（令和2年度②一））。なんとなく書けた、話せた、読めたというのではなく、児童自身が目的に応じてどのような点に着目したら自分の考えが広がったり、深まったのか、自覚するとともに、学び方（知識）を共有（習得）し、目的に応じて活用していくよう授業展開を工夫しましょう。

次号（11月発行予定）に続く。

次号では、実際の問題を取り上げ、授業改善方法を紹介予定。



平成 27 年から『ひろがる言葉 小学国語』四下に『ウミガメの命をつなぐ』という説明文を掲載しています。昨年度より教科書が改訂されましたが、『ウミガメの命をつなぐ』も構成を変更しました。改訂前の文章には、教員のかたがたから「時系列が行ったり来たりするのは、4 年生にとっては理解が難しい」というご意見をいただいております。それを受けまして、改訂版では時系列にそって話が前後しないような構成に変わっています。4 年生にも読みやすい文章に変わったと感じていただけるのではないのでしょうか。



1. 教材への反響

これまでに全国の小学校から多くの反響があり、北海道から愛媛県まで多数の小学校からお手紙、感想文をいただきました。愛媛県松山市からわざわざ名古屋まで足を運んで、ウミガメの飼育現場を見学に来てくださった先生もいらっしゃいました。また、教科書を読んで実際に名古屋港水族館にウミガメを見に来てくれた児童もたくさんいます。

さらに、平成 30 年 11 月の第 48 回全国小学校国語教育研究大会名古屋大会では、会場校の一つの名古屋市立大宝小学校において、4 年生の公開授業で本教材が扱われました。私も著者として招待していただき、授業に参加しました。全国から集まった教員のかたがたの前で、自らが関わった教材がモデルとして採用されたことはとても感慨深いものでした。

2. 教材中のアカウミガメのその後

教材の中には、名古屋港水族館で調査をしているあるアカウミガメの話題があります。

平成 23 年 9 月 5 日、長崎県対馬市の定置網に 1 匹

のアカウミガメが迷い込みました。このアカウミガメは、平成 8 年に名古屋港水族館で生まれ、平成 10 年 8 月 5 日に愛知県田原市の海岸から放流されたものでした。飼育下で繁殖したアカウミガメが、放流後 13 年という長い年月を経てから保護されたのは世界でも例がなく、学術的にも貴重な成果ということで新聞に掲載されました。

このアカウミガメは、名古屋港水族館で体調管理のために 9 か月間飼育されたあと、翌平成 24 年 6 月 4 日に標識と送信機を装着されて長崎県五島列島沖から再び放流されました。

このアカウミガメが対馬で採捕されてから約 10 年、教科書に掲載されてから 6 年が経過しました。

いただいた感想文の中には質問も多くあり、中でも多かった質問は「長崎で再放流をしたウミガメは、その後どうなりましたか」というものです。

このアカウミガメは、その後平成 25 年 10 月 10 日に同じ長崎県の壱岐市の小型定置網に迷い込みました。その時には甲羅に装着されていた送信機は既に外れていましたが、タグが付いていたので長崎で放流した同じアカウミガメであることがわかりました。アカウミガメは元気な様子だったそうです。放流場所からさほど遠くない長崎県壱岐市で発見されたことは、卵が産めるように十分に成熟するまで、東シナ海辺りで成長するという我々の予想どおりでした。今後は送信機による位置情報の追跡はできないので、またどこかで誰かに見つかり、タグを読み取ってもらわないとなりません。いつの日か、産卵のためにどこかの砂浜に上陸したという連絡が入ってくるのを心待ちにしています。

3. 水族館の最新の取り組み

「名古屋港水族館で今取り組んでいることはなんですか」という質問も多くいただいております。

名古屋港水族館では、これまで約 1 万匹の子ガメの孵化を成功させてきました。ただし、水族館生まれどうしのオスとメスで繁殖した例はありません。現在、飼育している大人のアカウミガメは 5 匹います。このうち水族館生まれのアカウミガメは、オスとメスが 1 匹ずつ

つきます。この2匹の繁殖に取り組んでいます。仕切りができる予備水槽で2匹を飼育し、繁殖の時期に仕切りを外して一緒にさせるのです。繁殖期以外を別々に飼育するのは、馴れ合いを防ぐため、お互いに相手への関心を高めるためです。この取り組みは既に6年前から行っていますが、いまだにうまくいきません。もし繁殖に成功すれば全国的にも珍しく、野生と同じライフサイクルを飼育下で再現できたこととなり、飼育方法が適切であったことの証にもなります。また、自然のウミガメを捕えることなく、国内外の水族館での展示個体の確保や、絶滅危惧種であるウミガメ類の保全増殖事業などにも貢献できるかもしれません。

4. 教材に関連した取り組み

名古屋港水族館では、教科書に掲載した『ウミガメの命をつなぐ』に関連した学習プログラムを用意しています。

毎年8月に名古屋市の教員向けに、教科書の内容を補足するウミガメの生態とその飼育、名古屋港水族館の取り組みについて講演を行っています。このときには、ウミガメ水槽や教科書に出てくる人工砂浜などの飼育現場も実際に紹介しています。昨年は残念ながら新型コロナウイルス感染防止のため中止になりましたが、今年はオンラインで開催いたしました。

そして、秋以降に4年生の児童向けに、教科書の背景となるウミガメの飼育についてのレクチャーを行っています。これは小学校単位での参加プログラムで、各学校の4年生全員が参加します。約300人収容可能なシネマ館で、名古屋港水族館の学習交流課の職員が映像を使って講義を行います。こちらも昨年はコロナ禍のため、キャンセルする学校がありましたが、Zoomを用いてオンラインでのレクチャーも行いました。特に、通常は名古屋市内の小学校を対象としているものを、オンラインでは遠方の小学校でも参加できますので、多くのお問い合わせをいただいています。



▲小学校向けレクチャーの様子



5. 教材に込めた願い

教科書にも書いていますが、水族館は単に娯楽施設としてあるだけではなく、研究活動も行っています。動物園や水族館には四つの役割があります。「レクリエーション」「種の保存」「調査・研究」、そして「教育」です。

多くの方が水族館を「レクリエーション」の場として認識していると思いますが、来館者に楽しんでもらうことは、もちろん水族館の大切な役割です。

「種の保存」は、絶滅の恐れがあるなど希少な生き物に生息地外での生きていける場を与えること、さらに繁殖させることで生き物を守っていくことです。水族館でのウミガメの繁殖はこれにあたります。

「調査・研究」は、水族館の飼育技術の向上のため、あるいは学術的に知見を得るために生き物について調べ、研究することです。水族館単独で行うのは難しい場合が多いので、大学や研究機関と連携して調査・研究をする場合が多くあります。アメリカ海洋大気局と協力してウミガメに送信機を付けて行動を調べたのがそうです。

「教育」は生き物について知ってもらい、さらにはその生き物を取り巻く環境について学び、考えてもらうことです。生き物を紹介する解説板や講演、水族館スクールなどの学習プログラムなどです。『ウミガメの命をつなぐ』が教科書に掲載されているのも水族館の「教育」活動の一つです。

『ウミガメの命をつなぐ』が教材として多くの小学生の教育に役立ち、そしてウミガメへの興味をもつことによって自然科学への導入になれば幸いです。

名古屋港水族館のホームページ
<https://nagoyaaqua.jp/>



「まなびリンク」を使ってみよう



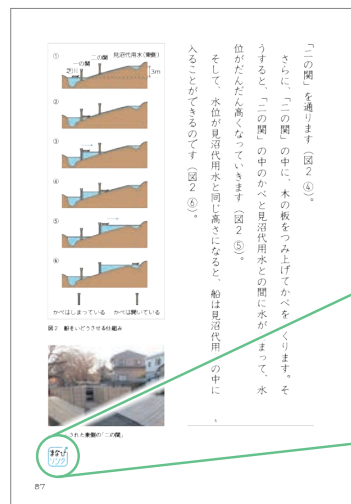
小学校国語「まなびリンク」
ウェブサイトはこちらから↑↑

令和2年度版の『ひろがる言葉 小学国語』には、教材とウェブサイトを連動させた「まなびリンク」があります。これは紙幅の都合や媒体の違いにより、教科書に掲載することのできなかつた補足的な資料を、ウェブサイト上で見ることができるものです。

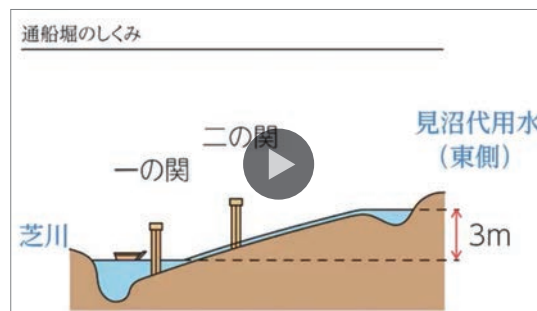
紙面上に「まなびリンク」マークがある教材では、ウェブサイト上にその教材に関連した資料を用意しています。ウェブサイトへは、教科書冒頭の「〇年生で学ぶこと」にある二次元コードを読み取るか、併記したURLを入力することでアクセスできます。

資料には、例えば「読むこと」教材の作者紹介のPDFや発展的な資料としての動画や写真、「書くこと」や「話すこと・聞くこと」教材のメモや話し合いの例の全文、更に外部サイトへのリンクなどがあります。

紙面上で「まなびリンク」マークを見つけたら、ぜひウェブサイトへアクセスしていただき、指導に活用していただければ幸いです。



▲「まなびリンク」のマーク（三下 p.87）



▲教材の理解を促す動画

次号（11月発行予定）に続く。

次号では、実際のコンテンツをもとに「まなびリンク」の活用方法を紹介予定。

本誌のデザイン

『小学国語通信 ことばだより』では、デザインに季節ごとの「かさねの色目」（平安時代以降の服飾文化に用いられた色彩）をイメージした配色を用いています。今回の号では、秋のかさねの色目の中から「小栗色」を選びました。この色目は、未熟な小栗の色を表したであろうと言われており、9月発行の今号にぴったりだとは思いませんか。ぜひ次号のデザインもご覧くださいませと幸いです。

※「かさねの色目」の組み合わせには、諸説あります。

小学国語通信 ことばだより Vol.3 2021（令和3）年9月発行

教育出版株式会社 編集局 国語科

〒135-0063 東京都江東区有明3-4-10 TFT ビル西館

TEL：03-5579-6278（代表）